

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■直売所・きなあつ瑞浪出荷者協議会

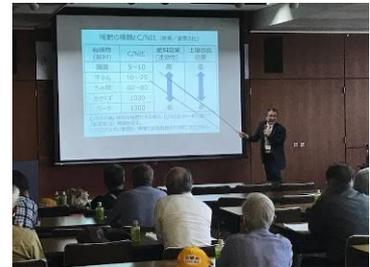
新規出荷者確保と冬野菜の生産拡大に向け本年度の活動計画を決定

5月13日、瑞浪市総合文化センターできなあつ瑞浪出荷者協議会第15回通常総会が開催され、生産者等60名が出席した。総会では、令和7年度の活動計画等が承認され、新規出荷者の確保と冬野菜の生産拡大に向け活動を展開していくこととなった。

協議会は平成23年に発足し、会員数は200名強である。減少傾向であった販売額は令和6年度に過去最高を記録し、来店者数も令和5年度より2万人増えるなど、順調に推移している。会員の生産意欲の向上を図るため、出荷点数や販売額で直売所経営に貢献した功労者30名に奨励賞が贈られた。

総会后、冬春野菜づくりに必要な土づくりの研修会が開催され、農業普及課から、堆肥等の施用が土壌の物理性を改善し、農産物の安定生産につながることを説明した。

今年度、協議会では、視察研修や春野菜研修会などの活動を予定しており、農業普及課は、栽培技術の向上を通じて農産物の出荷拡大を支援していく。



【研修会の状況】



【奨励賞の交付を受ける生産者】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■水稻（酔むすび）・新酒米による産地づくり研究会

酔むすびの生産安定を目指し実証ほを設置

新酒米による産地づくり研究会に参画する経営体による県育成酒米新品種「酔むすび」の田植えが5月10日から始まった。

「酔むすび」は、日本酒のブームの高まりを背景に、東濃管内の酒蔵から、地元産の酒米生産要望があり、中山間地向けの酒米品種として、中山間農業研究所が育種し、令和6年5月23日に品種登録出願された。

品種の特徴は、酒米特有の米粒の中心部が白く濁る「心白」が小さく、栽培においては、茎が太くて倒れにくい特徴がある。酒蔵、生産者からの期待が高く、東濃・恵那管内での栽培が始まったが、令和6年産は十分な収量が確保できなかった。このため、令和7年産は、栽植密度と施肥の改善を行い、収量の安定確保を目指している。

農業普及課では、管内で582aを実証ほとして位置づけ、栽培技術の確立を図っていく。



【田植えの状況】



【酒蔵代表者と生産者】